
バルトロメウス・スプランゲル《知恵の勝利》に関する一考察
— ルドルフ2世の宮廷における武装した女性像の図像的特徴を中心に —

本研究は、バルトロメウス・スプランゲル作《知恵の勝利》(ウィーン美術史美術館、1595年頃)の人物解釈を通して、作品全体の意味内容を考察するものである。本作品中の人物については諸説あるが、場面中央がメドゥーサの胸当てを付けた知恵の女神アテナであり、前方左が武装した戦争の女神ペローナであることが、多くの論者にとって共通の見解になっている。その上で、中央のアテナの周囲にヘルメスや、ムーサあるいは自由学芸とみられる人物が配されることから、ここに雄弁と学識をつかさどるヘルマテナの暗示を読み取る向きもあるが、全体として絵画の解釈は定まっていない。そこで、本発表ではプラハの宮廷における武装した女性の図像的特徴を探ることで、絵画中の人物について再解釈を行い、その後本作品の主題を考察していく。

スプランゲルはルドルフ2世に仕えたが、その宮廷で描かれた作品にはしばしば武装した女性が現れる。その特定は困難であるが、主としてアテナかペローナ、ローマと解釈される。ジュリオ・ボナゾーネによる版画では、アテナとペローナがメドゥーサによって区別されている。しかし、プラハでは、スプランゲル原画の銅版画《戦の角笛を吹くペローナ》(1600年)のように、メドゥーサを伴っていてもペローナとして描かれることがあり、アテナとペローナの混同が見られる。一方ローマの場合、1625年のリーパの『イコノロギア』では、武装して戦利品の上に座り、片手には杖を、もう片方の手には小さな勝利の女神を持つものが基本の型として定義されている。プラハにおけるローマの作例をみると、基本的にはその型と同様の特徴を備えているものの、パラディオンを持つなど幾つかのヴァリエーションも見られる。

プラハでアテナとペローナがしばしば混同されているならば、《知恵の勝利》においても同様の可能性が高い。先行研究では前景左の女性をペローナと解釈し、トルコ戦争に結び付けているが、そもそも中央の女性がアテナとペローナの両義を有するならば、中央の女性のみでトルコ戦争の含意を読み取ることができる。そして、前景左の武装した女性はアテナとペローナ以外の人物となり、ローマ、即ち神聖ローマ帝国を暗示する人物と認められるだろう。このとき、中央のアテナはローマが持っているパラディオンの意味をも持つ可能性がある。一方、前景右の鉄筆を持ち本を広げる人物は、その歴史を記すクリオと考えられる。

以上の人物解釈から、本作品におけるローマは16世紀のアウグストゥスであるルドルフ2世を暗示するものと考えられる。即ち、中央の人物はアテナとペローナのダブル・ミーニングであり、ここにルドルフ2世の戦争事業と文化事業を称揚し、彼の文化・芸術面、倫理・政治面の両面において優れた治世を表しているのである。